

追悼

北村四郎先生を偲ぶ

Dedicated to the Memory of the Late Prof. Siro Kitamura



Prof. Dr. Siro Kitamura
(1906–2002)

北村四郎先生は1992年3月21日、老衰のためお亡くなりになった。満95歳であった。先生は好きなことを存分にやって天寿を全うされ、誰もが羨む幸せな一生を送られた。

先生の講義は決して面白くはなかった。「エングラーに従ってやります」と、「目」の特徴について原稿を棒読みされた。これはたまらんと学生が集まって内容を変えて貰うようお願いして何か先生のやっておられることについて話して貰ったが、それもあまり面白くなかった。冬場になると、風邪をひいたということでしょうっちゅう休講になり、神経質に身体を大切にされた。それが他の先生方をしのいで長寿を保たれた原因の一つであろう。野外実習などで貴船などに連れていってもらったが、漫談ばかり聞かされた。先生は人前で真面目な話をするのがお好きではなかった。「新種について話したら、誰かに出版されるかも知れん」といって、学会も、創立以来慣れ親しんだ植物分類・地理学会を除いて、ほとんど出席されなかった。

講義は下手であったにもかかわらず、漫談は上手であった。先生の下にいた田川基二助教授は講義がうまく、理屈っぽくて学問の話

が好きであった。先生が学問の話 avoided のはそこにも理由があったかも知れない。昭和天皇にたいしてもしばしばご進講され、那須のご用邸にもいかれた。「タンポポはフランス語でピサンリといい、寝小便に効くという意味やと説明したら大笑いされた。天皇さんも寝小便てことを知ってたのかいな」という話はよく聞かされた。先生の軽妙洒脱な語り口に天皇も和まれたのであろう。

私も何回か先生の植物採集について行った。それらのうち、尾瀬旅行はとくに楽しかった。先生は蛇紋岩植物の研究をしておられ、1952年、至仏岳でオゼソウを採集したいということで、私は大阪大学の学生数人を連れてお供した。鳩待峠をこえて尾瀬に入ったが、植物採集許可証をもっておらず、尾瀬沼で管理人に見つかって大いに絞られた。先生が何か言ってくれると期待したが助けては貰えなかった。その頃は国立公園の管理なども不十分で、先生もひょっとすると許可証をもっておられなかったのではないかと疑っている。帰途、大清水のバス停にたどりついた途端、売店に飛び込んでマクワウリを買い、ナイフで皮をむいてかぶりつかれた。今も、私は先生の好物はマクワウリであると信じている。先生も尾瀬のことははっきりと記憶しておられ、私の定年退官パーティーのときにも駆けつけていただいて尾瀬の話をしてくださった。とにかく、申請だ許可だというのは大嫌いだった。汽車も指定席は使われなかった。まさに自由人であった。良くも悪くも個人主義に徹し、人の妨害もされなかったし、人に妨害されることを極端に嫌われた。

1977年、私がエデンバラにいたとき、先生はパリ自然史博物館でキク科植物の同定をされ、帰途、奥さんと一緒にロンドンに立ち寄られた。私は先生のホテルへいき、パリですりに会った話など聞いた。中華料理店で御馳走になった。その時、ビニール袋に塩昆布を入れたのを取り出して、「これがないとあか

んのや」といって美味しそうに食べだされたのは印象的であった。確かに先生にはかなり頑固なところがあった。自分の身についた習慣をなかなか変えようとはされなかった。

1950年頃より、ヒマラヤ、アフガニスタンの植物研究に没頭された。国立科学博物館に保管されていた河口慧海師のチベット植物の標本や、中尾佐助先生の採集されたネパールの標本、その他、多くのヒマラヤ植物の標本を集めて鑑定し、続々と新種や新知見を発表された。「新しい標本では英国よりこっちが上や」と、意気軒昂たるものがあった。1955年には、木原 均先生のパーティーの一員としてヌーリスタンへ植物採集にいかれた。しかし、自分が中心になって探検隊を組織し採集にいかうとはされなかった。私がお勧めしたときも、「採集するのが好きな者と研究するのが好きな者があって、それでええんや」と一蹴された。中尾先生も「自分はトップ・バッターとして結構働いていると思うが、肝心の三番、四番が打ってくれない」と嘆いておられた。そこに北村先生のヒマラヤ研究の限界があった。やがて日本のヒマラヤ研究は、京都大学より原 寛教授を中心とする東京大学へと移っていった。

新聞や園芸雑誌などには良く雑文を載せられた。先生の文はコマ切りの繋ぎ合わせで、決して美文ではないがある種の魅力があった。一般に物事に批判的であることが多く、それが文章に現れた。確かに先生は文化人であった。何かを書かれるときには、鉛筆と消しゴムか、ペンとインキであった。ボールペンを使っておられるのは見たことがない。私はペン習字が苦手で、やろうとするとあっちこっちにインキが付く。それをスイスイやられるのは驚きであった。確かに先生にはかなり頑固なところがあった。今では時代後れになっていることでも、自分で決められたらそれを

断固として貫かれた。先生の植物図鑑はキク科より始まっている。今時そのような配列は見たことがない。先生にすれば専門のキク科より始まるのは気持ちがよかったのかも知れない。そのように流れと矛盾するようなことを平気でやられたが、それがあるいは文化的と写ったのかもしれない。

北村先生は保守的な人ではあるが、一方では先駆的な面も備えておられた。ヒマラヤ植物の研究もそうであるが、化学分類学にも関心をもっておられたし、また、講義のなかで、ウマノアシガタ目がもっとも原始的な被子植物であると強調された。「有用植物学 朝倉書店 1952」のなかでも、ウマノアシガタ目を要に置いた被子植物の系統図を示しておられる。エングレー分類学が主流であった当時としては極めて印象的であった。先生はいろいろなことをフイフイと思いつかれるが、それをまとめたり、体系付けたりすることは苦手であった。良いことがあると我がことのように喜んでくださったが、そうなるように働いてはくださらなかった。先生にとって、面白いことと面倒なことがあって、面倒なことはほったらかしで、面白いことばかりに熱中された。

そのようなお人柄故、先生は権謀術策には縁がなく、我が田に水を引くようなこともされなかった。ノンキなトウさんのような風貌と相俟って、多くの人に愛され、本当に幸せな一生を送られたと思う。

この間、先生のお宅の前を通った。表札は先生の手で書かれた「北村四郎」のままで、木は茫々と茂っていた。次男を亡くされ、幸せそうに見えても、晩年は先生も本当は淋しかったのかもしれないと思った。

ご冥福をお祈り申し上げます。

(田村道夫)